中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年五月二十五日　印刷
昭和二十七年六月一日　再版発行
昭和二十八年三月二十日　三版発行

（乱丁、落丁はお取替いたします）

大菩薩峠　第九巻
定価三百八十円
送料　五〇円

著作権者　中里幸作
発行者　山田福太郎
印刷者　東京都品川区南品川五ノ十三　森高繁雄
東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地
大菩薩峠刊行会
発行所　株式会社　彩光社
振替　東京　一九三九七六番
電話　神田（25）二六九一番

富士高速印刷株式会社印行

大菩薩峠

第九卷

目次

めいろの卷……五
鈴慕の卷……三九
Oceanの卷……四七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

題字　道重信教

裝畫　横山大觀

口繪　北蓮藏

編集責任

寺島柾史

梁取三義

二十六　めいろの巻

一

信濃の國、白骨の溫泉――これをハクコツと讀ませたのは、いつの頃、誰にはじまつたものか知らん。

先年、大菩薩峠の著者が白骨溫泉に遊んだ時、机龍之助のやうな業緣もなく、お雪ちやんのやうにかしづいてくれる人もない御當人は、獨去獨來の道を一本の金剛杖に託して、漂然として一夜を白槽の湯に明かし、その翌日は乘鞍を越えて飛驒へ出ようとして、草鞋のひもを結びながら宿の亭主に問うていふことには、

「一體、この白骨の溫泉はシラホネがいゝのか、シラフネが正しいのか」

亭主がこれに答へていふことには、

「シラフネが本當なんですよ、シラフネがなまつてシラホネになりました……シラホネならまだいゝが近頃はハクコツといふ人が多くなつていけません――お客樣によつてはかつぎますからね」

シラホネをハクコツと呼びならはしたのは、大菩薩峠の著者あたりもその一半の責を負ふべきものかも知れない。よつて內心に多少の恐縮の思ひを抱いて、この宿を出たのであつたが、シラホネにしても、ハクコツにしてもかつぐ通りは同じやうなものではないか。こんなことから、殺生

小屋を衞生小屋と改めて見たり、悲峠をおめでた峠と換へて見たりするやうなことになつてはたまらない。

そんなことまで心配して見たが、けふこのごろ風のたよりに聞くと、白骨の溫泉では、どうか大菩薩峠の著者にもぜひ來て泊つてもらひたい、こゝには四軒宿屋があるから一軒に一晩づつ泊つても四晩泊れる――と何かしらの好意を傳へてくれとか、くれるなとかことわりがあつたさうである。して見ればハクコツの呼び名が宣傳になつて宿屋商賣の上に幾らかの利目が眼前に現れたものとも思はれる。しかし、宣傳と提灯がどう間違つても、白骨の溫泉が別府となり熱海となる氣づかひはあるまい。まして日本アルプスの名もまだ生れてはゐないし、主脈の高山峻嶺としても、傳說に似た二三の高僧連の遊錫のあとを記錄にとゞめてゐるに過ぎないし、物を溫むる湯場も空が冷えれば人は逃げるやうに里に下る時と處なのですから、ある夜のすさびに北原賢次が筆を取つて

白狼河北音書絶
丹鳳城南秋夜長

と壁に書きなぐつた文字そのものが、如實に時の寂寥と人の無聊とを物語つてゐるやうであります。

その時、その溫泉に冬越しをしようといふ人々――それはあのいやなをばさんと、その男妾の淺

吉との横死を別としては前卷以來に增しも減りもしない、お雪の一行と、池田良齋の一行と俳諧師と山の案內人と、獵師と、宿の番人と、それから最近に面を見せた山の通人——兎も角も、こんなに多くの可なり雜多な種類の人が、こゝで冬を越さうとは、この溫泉はじまつて以來、例のないことかも知れません。

そこで、この一軒の宿屋のうちの冬籠りが、ある時は爐邊の春となり、ある時は湯槽に話の花が咲き、ある時はしめやかな講義の席となり、ある日は俳諧の輕妙に興がわくといつたやうな賑ひが不足なく保たれてゐるのだから、外はいかに寒くならうとも、この湯のさめない限り、この冬籠りに退屈の色は見えません。

殊に、この冬籠りに無くてならぬのはお雪であります。見やうによれば、お雪あるがゆゑに、この荒凉たる秋夜に不斷の春があると見れば見られるのであります。誰にもよいお雪ちやん——どうかすると、この頃めつきり感傷的になつて、ひそかに泣いてゐるのを見るといふ者もあるが、それでも表に現れた處は、いつも氣立のよい、人をそらさぬ、つくろはぬ愛嬌に充ち滿ちた微笑を誰に向つても惜しむことのないお雪ちやん——

お雪ちやんは今、柳の間で縫ひとりをしてゐる。

縫ひとりといつても、こゝでは道具立てをしてかゝるわけには行かないから、たゞあり合せの黑いぴらうどに白に絹糸でもつて、胡蝶の形を縫ひ出して樂んでゐるまでのことです。手すさみに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

繪をかいて樂むやうな氣持で、針を運ばせながら、浮き上つて來る物の形に自分だけの興味を催して、自己滿足をしてゐるまでの事——風呂敷には狹いし、帛紗には大きい、縫ひ上げて、自家用にしようか、贈り物にしようかなどの心配はあと廻しにして。

物を縫うてゐる女の形を見ればそれが若くとも處女といふものはない。否、娘といふものはない。Wife といふ文字には物を縫ふ女といふ意味がある さうですが、いかなる若い娘さんをでも、そこへ連れて來て縫ひ物をさせてごらんなさい、それは、もう娘ではない、妻である。否、妻である外の形に見ようとしても見えないものであります。

自然、婢婦も驕婦も物を縫うてゐる瞬間だけは良妻であり賢婦であることの外には見えない。

自分の娘を、いつまでも子供にしておきたいならば縫ひ物をさせてはならない。

老孃の自覺を心ねたく思ふ女は、決して針さしに手を觸れないが宜しい。

獨身のさびしさを心に惱む男は、淫婦を見ようとも針を持つ女を見てはいけない。だが、安心してよい事には、お雪がかうして針を持つてゐる處を、誰一人見てゐる者はないし、お雪とても、誰に見せようとの心中立でもなく、無心に針を運んでゐるうちに無心に歌が出て來る。心無くして興に乘る歌だから、鼻唄といつたやうなものでせう。それはお雪が名取りに近いところまでやつたといふ長唄でもない。好きで覺えた新內の一節でもない。幼い時分から多少の感化を受けて來た、さうして日本の有ゆる聲樂の基礎ともいふべき聲明のリズムに、淨瑠璃の訛りがかゝつた

やうな調子で、無心に歌はれる歌詞を聞いてゐると、萬葉集でした。

この頃中、心にかけて習つてゐる萬葉集の中の歌が、そこはかとなく、例の聲明と淨瑠璃のリズムで、お雪の鼻唄となつて、いはゞ運針の伴奏をなして現れて來るらしい。

巖すら
　行きとほるべき
　ますらをも
戀てふことは
　後悔ひにけり

これだけはリズムの節調ではなく、散文の口調ですら〳〵と口をついて出でました。

何故か、お雪はこの歌が好きです。それは歌の心が好きなのではなく、口當りがいゝから、それで思はず繰返されるのかも知れない。さうでなければ相聞の歌では、これが一番男性的であるといふやうな意味で、良齋先生の愛誦となつてゐるところから、そのロうつしが、思はず知らずお雪の口癖になつてゐるのかも知れない。

萬葉の歌は上代の歌人の――上代の歌人とのみいはず、すべての人類の血と肉との叫びであります。人生に戀にゐて戀を歌ふほど苦しいものはなく、戀を知らずして戀歌をうたふほど無邪氣なものはありますまい。

その時、湯槽の方で高らかに笑ふ男の聲がする――間もなくトン〳〵と可なり足踏みを荒く三階の梯子を上る人の足音がする、若しやとお雪は狼狽しました。こゝへ誰か訪ねて來るのではないか知ら、あの遠慮のない北原さんでも押しかけて來るのか知ら……それではとあわたゞしく縫ひとりを押し片づけて心構へをしてゐましたが、足音はそれだけで止んでこゝへ渡つて來る人もありません。

來るべき人が來ないと思ふと、淋しさはまさるものです。殊にあれほど荒つぽく三階の梯子段を踏み鳴らしながら、上つたのか下りたのか、それつきり立ち消えがしてしまつたのでは、徒らに人に氣を持たせるばかりのものです。

いやなをばさんと、男妾の淺吉とがゐなくなつてから後、この三階は、わたし達で占領してゐるやうなもの、上つたならば、當然、わたし達を訪れる人であらうのに……立ち消えになつてしまつた。

お雪は、また縫ひとりをとり上げる氣にもならず、相聞の歌を繰返す氣にもならず、手持無沙汰の加減で、しばらく所在なくしてゐたがその時、ゾツと寒氣がしたものですから、急いでぬぎぱなして置いた黄八丈の丹前を取つて羽織りかけ、さうして、こたつのそばへずつと膝を進めて、からだをすぼめて、兩手を差こんでずつと向ふのふすまを見つめたまゝでゐました。

この時、湯槽は急に賑しくなつて、高笑ひと、無駄話の聲までが手に取るやうに響いて來ますけ

れども、お雪はそこへ行つて見ようといふ氣にはなりません。
以前は、誰がゐても遠慮なく入つて行つたものですが、この頃は、どうしたものか、成るべく人目を避けるやうにして、誰も入つてゐない時をねらふやうにしては、こつそりと、お湯につかるやうになりました。
それといふのは、日外あのいやなをばさんから、からかはれて、乳が黒いといはれたのが、突き刺されたやうに胸の中に透つてゐるものですから、それが氣になつて昨日までは人に見せても恥かしくないと思つてゐたこの肌が、今日は自分で見るさへも恐ろしくなることがあるのです。
お雪の不安はその處から初まりました。——それがない時には、無邪氣に、晴れやかに誰にも同じやうに愛嬌を見せ、同じやうに可愛がられてゐるお雪ちやんが——ふとその事に思ひ當ると暗くなります。
何ともいへない不安がこみ上げて、こんな筈はない、そんな事があらう筈はないと、散々に打ち消しては見ますが、打ち消しきれないで、とう〳〵泣いてしまふことが、この頃中、幾度か知れません。
あゝ、辨信さんがいふ通り、こんなことから、わたしは生きてこの白骨の溫泉を歸ることが出來ないのかも知れない——あれは、わたしの身の上の豫言ではなくて、その運命は、いやなをばさんだの、意氣地のない淺吉さんだのが代つて受けてくれてしまつたのではないか、今に初まつた

事でない辨信さんの取越苦勞――それを他事に聞いてゐたのが、追々にわが身に酬つて來るのではないか。それがために、お雪は書いても屆ける由のない、屆いても見せるすべのない盲目法師の辨信に向つて、ひまにまかせては手紙を書いてゐるのは、たゞこの心の不安と苦悶とを他に向つては訴へる由もないからです。

つい今まで、晴れ〴〵してゐたお雪の心が、また暗くなりました。

ぼんやりと、見るともなしにふすまを見つめてゐた眼から、涙がハラ〳〵とこぼれました。ついに堪へられなくなつて、面もこたつのふとんの上に埋めて、なきじやくつてしまひました。

だが、自分ながら、何んでそんなに悲しいのだかわかりません。身に覺えがない、何も知らないと自分で自分をおさへつけてゐながら、それがおさへきれないで泣いてしまふ心持が、どうしてもわかりません。

そこでお雪は思ひきり泣いてしまひましたが、身を入れてゐたこたつの火が消えてしまつてゐるといふのを知つたのは、その後の事でありました。

あゝ、火が消えてしまつた。それでもお雪は少しの間、身動きもしなかつたが、やがて立上がつて炭入れと十能を取つて、丹前を引かけたまゝ障子を開けて廊下へ出ました。

お雪が炭取りと十能を持つて外へ出たのは、自分の冷めた炬燵へ、新らしく火と炭とを追加のためかと思ふとさうでもなく、靜かに廊下を通つて、右へ鍵の手に廻つた一番奥の部屋まで來て見ました。

そこへ來ると、上草履が綺麗に一足脱ぎ揃へてあるのを見て、ホツと安心したやうな思入れで、外からそつと障子を引き、

「お休みでございますか」

「いゝえ、起きてゐますよ」

「御免下さいまし」

お雪は障子を引き開けて中へ入りました。こゝは松の間といふけれども、實は源氏の間とでもいつた方がふさはしいのでせう、十餘疊も敷ける可なり廣い一間ですが、その襖の腰には一ぱいに源氏香が散らしてある。

「めつきり、お寒くなりました」

「寒くなつたね」

室の主といふのは机龍之助であります。龍之助も同じやうな丹前を羽織つて、片肱を炬燵の上に置いて、頬杖をしながら、こちらを向いて、かしこまつてをりました。

何を考へるでもなし、考へないでもなし、白骨の湯に曝されて、本來蒼白そのものゝ面が一層蒼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com